

# 土偶女子



石垣 美南海

ISHIGAKI Minami

㈱協和エクシオ  
土木事業本部



突然ですが、みなさんは「土偶」という単語を聞いて何を思い浮かべますか？おおよその方は日本史の教科書に載っていた縄文時代の土製品を想像したのではないのでしょうか。いきなり、なぜこのような質問をするのか、それは私が土偶女子だからです。「土偶女子」とはなんぞや。初耳だという方もいらっしゃると思いますが、読んで字の如く土偶が好きな女性のことを「土偶女子」と呼ぶのです。

周囲に土偶が好き！と言ってもなぜ土偶？と聞き返されます。私の場合は推しメンならぬ「推し土偶」に出会ってから土偶の魅力にはまり土偶女子になりました。その推し土偶とは青森県亀ヶ岡遺跡出土の遮光器土偶（通称：しゃこちゃん）です。しゃこちゃんとの出会いは約8年前、東京国立博物館にて開催された「国宝 土偶展」に展示されていたしゃこちゃんに一目惚れしたことから私の土偶人生が始まりました。

しゃこちゃんの魅力はあの独特の目つきとマスクottのような不思議なシルエットです。日本史の教科書でも遮光器土偶は目にすることがあります。その時は奇妙な形の焼き物としか認識せず、特段、土偶に対して特別な感情を抱きませんでした。しかし生のしゃこちゃんの姿を見た瞬間、教科書で見た奇妙な焼き物が、エネルギーを秘めた芸術作品とし

て私の目に映りました。それから土偶の世界に足を踏み込むようになりました。

土偶の魅力に気付いてからは、土偶を含め縄文土器の世界はとても奥の深い魅力的なものだと考えています。土偶が作成された縄文時代はまだ日本列島に文字が伝来していないため、土偶が造られた目的がはっきりしていません。その分、縄文時代の人々がどのような思いを込め作製したのか。思いを馳せるだけでも時間がすぐに流れてしまいます。

土偶製作に対する一般的な説は、土偶は女性を象ったものが多く出土されたので安産を祈願して造られた。また、手足の一部が欠けた状態で発見されることが多いので、病気や怪我の身代わりとして造られた説などがあります。

実際に博物館で土偶を眺めながら、なぜ土偶を造られたのか、縄文時代の暮らしやその時代に暮らした人々について考えるだけでも、日常の喧騒から離れることが出来て、気分転換が出来る土偶は私にとっては特別な存在です。

この土偶女子なかなか悩みの多き生き物なのです。まず、土偶と埴輪を同一視している人が多くて大変なのです。土偶が趣味と宣言しても、まずは土偶と埴輪の違いの解説から始めなければならないのです。私も土偶の話をしているのか土偶と埴輪の違いについて語っているのか分からなくなることが多々あります。そして土偶女子が少ない！（ような気がします）。歴史上の偉人が好きな「歴女」や仏像が好きな「仏女」はメディアにもよく取り上げられていますし、みなさんの周りにもいるのかもしれませんが、土偶女子はみなさんの周りにいますか？ちなみに私は生まれてこの方一度も土偶女子に出会ったことがありません。残念ながら。

話は少し逸れてしまいますが、歴女・仏女に続くなら土偶が好きな女性の事は「土偶女<sup>どぐじょ</sup>」と呼ばれるのではないかと考えていたのですが、土偶女子の



自宅の本棚と土偶



「縄文—1万年の美の鼓動」のポスター

方が一般的らしいですね。検索エンジンで「土偶女」で完全一致検索すると約1,270件、「土偶女子」で完全一致検索すると約4,250件でしたので、世間では土偶女子という呼び方が一般的らしいですね。「土偶女」の方が語感もかわいらしいですし、ドロジョーのような色気も醸し出せそうな雰囲気もありそうで個人的には気に入っていたので、「土偶女」派の私としては少し残念です。

いきなり土偶の魅力を語ったら、土偶女子は休日には必ず、縄文遺跡巡りや博物館巡りをしていると思われそうですが、私の場合はゆるく土偶活動をしているだけです。博物館や美術館も気になる土偶が展示される時にしか足を運びませんし、自宅の本棚も土偶や縄文時代の書籍で埋め尽くされているわけではありませんし、ショッピングセンターなどで土偶のカプセルトイを見かけても、全種コンプリートするまでレバーを回し続けるわけでもないの（せいぜい2、3回程度レバーを回す程度です）、たまに私は土偶女子と名乗っていいのかと自問自答してしまうほどのゆるい土偶活動しかしていないのです。

拙稿を書いている時点（2018年8月初旬）での、最新の土偶活動は東京国立博物館で開催された特別展「縄文—1万年の美の鼓動」に行ってきました。縄文時代の特別展ということもあり、全国各地から出土された土偶や縄文土器が多数展示されていて、遠方の博物館に収蔵されている土偶たちを一度に目にすることが出来て、眼福状態でした。なかでも国宝の土偶・土器6点のみ陳列していた展示室は赤色を基調とした非日常的な空間でしたが、その展示室に負けない圧倒的な存在感を放つ国宝の土偶や土器を鑑賞することが出来ました。国宝の中でも新潟県笹山遺跡出土の火焰型土器は見るだけで縄文時代の人



縄文土器の展示

々の生きる原動力に触れたような錯覚を起こしました。現代に生きながら縄文人の生きることに對する熱量を感じ不思議な気分でした。あの岡本太郎も縄文土器に触れたとき身体中がひっかきまわされ、なんともいえない快感が駆け巡ったと著書に書いていたので、縄文土器には悠久の時を超えて現代人の感情に訴えかけるものがあるのかなと考えています。

もし、拙稿を読んでいただいて土偶や縄文時代に興味を持っていただけたら、お近くの博物館や郷土資料館にぜひ、お立ち寄りください。土偶や土器たちが、みなさんにお会い出来るのを楽しみにしているはずです。博物館や資料館だけでは物足りないという方がいらっしゃったら、ぜひ遺跡にも行ってみてください。もし、博物館や遺跡だけでも物足りないという方がいらっしゃったら、青森県つがる市にあるJR五能線の「木造駅」がおすすめです。なんとこの駅は、遮光器土偶（しゃこちゃん）を模した駅舎になっているのです！遮光器土偶が好きすぎて夜も眠れないという方はぜひ木造駅へ！

